

「地元自治体と住民から見た須坂病院」

長野県須坂市健康福祉部

地域医療福祉推進役 小林 美佐子氏

皆様こんにちは。須坂市におります地域医療福祉推進役の小林美佐子でございます。今小口院長の報告を聞いて、大田病院事業局参与がここにいらして、私がいてということで非常に懐かしく思っておりますし、須坂病院の取り組みを今小口院長が説明してくださったのですが、それが土台となって今の私の活動があるのではないかと今聞きながら思っていました。

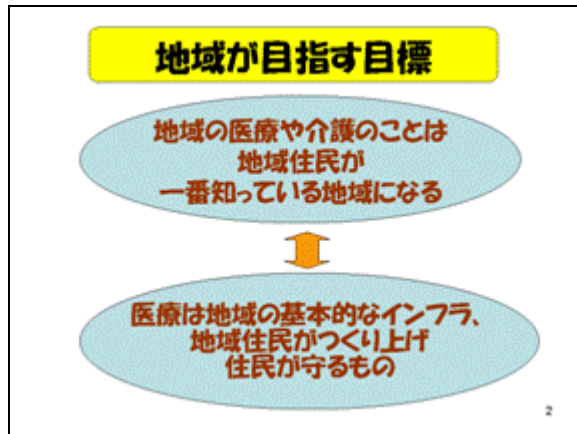
昨年の7月からですのでまだちょうど1年なのです。1年間の取り組みなのですが、もともと須坂市は医師会と須坂病院との連携がいいこと、それから地域住民の方が非常に活動的な方が多くて、ちょっとお声掛けをするといろいろな意見はいただけますけれどもご協力もしていただけるような状況です。

で、まだ1年の取り組みですが、私がかかわってきた活動の内容を皆様にご報告したいと思いますので、よろしくお願いいたします。

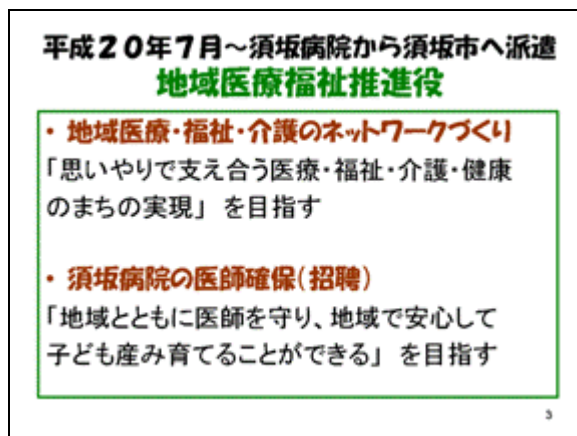


皆様ご存知でしょうか。須坂動物園が潰れるかどうかの瀬戸際の際に、全国的に話題となった赤カンガルーの「ハッチ」なのですけれども、この「ハッチ」が救ってくれました。今でも非常に経済効果があるようです。

それで須坂市を中心として、小布施町・高山村を含めまして、須高地区といっているのですが、私の活動範囲は須高地区です。



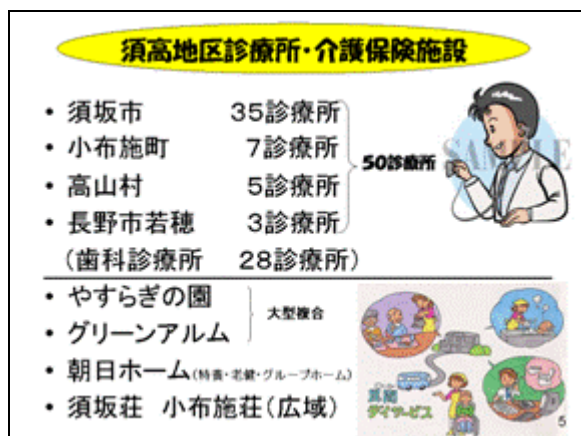
これが、須高地域が目指す目標です。医療は地域の基本的なインフラですので、まず地域の医療や介護のことは地域住民、地元の住民が一番知っている地域になるということを目指にいたしました。



そのようなことで私は須坂病院に着任し2001年から須坂病院の窓口として地域連携室で地域との取り組み、提供をやっていたのです。昨年7月に今度は病院から外へ出て、外から須坂病院を中心とした地域医療・福祉の取り組みということで、まず私が派遣された目的は、ひとは産科医が不足して、昨年4月からお産ができないというような状況になりまして、それで地域住民とともに産科医を招聘するという大きな目的。それからもうひとつはもともとということで非常に連携のいい地域でしたので、地域医療、福祉、介護のネットワーク作りという二つの目的をいただきまして、須坂市へ参りました。



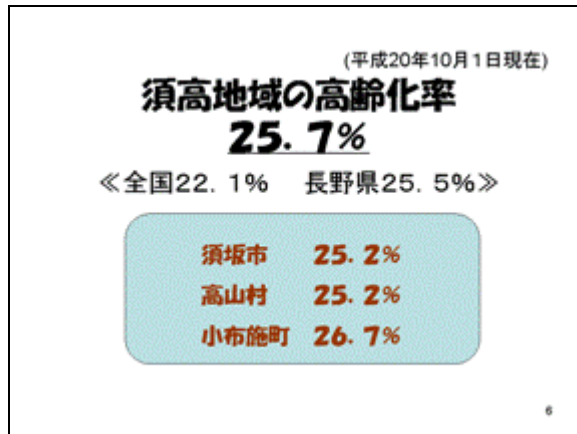
そのようなことで須高地域には規模の異なった3つの病院、急性期中心の須坂病院がありまして、すぐお隣に療養中心のグループホームを持った轟病院～100床足らずのところですね、それから隣の小布施町に行きましてホスピス、介護的リハ、療養病棟を持ったケアミックス型の新生病院、この3病院の連携が非常にいいんです。元々。競合することなく、日々連携が図られています。



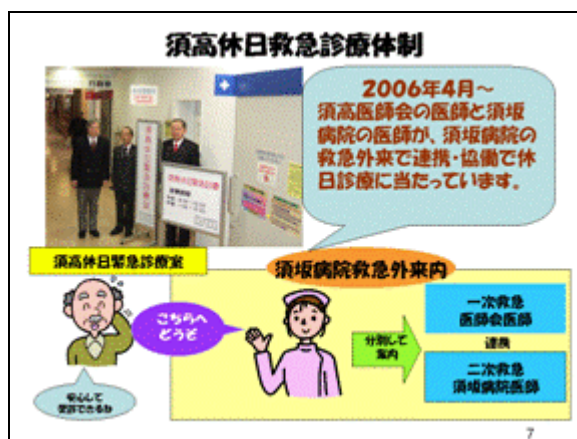
それから須高医師会というっておりますが診療所も非常に協力的で、50診療所あるのですが、長野市の若穂地区の医師も須高医師会に加入していますので、人口の割に診療所が多く、東京都と同じといわれています。それから歯科診療所はすべて須坂病院の登録医になっています。

で、過去に小口院長や大田事務長と診療所を一件一件回ったという経過もございます。

それから、介護施設が大型複合施設がドカンと2つありまして、保育所も備わった大型複合施設がございます。そのほかに須坂荘、小布施荘などの公益の特別養護老人ホームなどがございます。非常に恵まれております。



須高地域の高齢化率ですけれども、長野県と同じで25.7%です。



元々須高地域ではほかの場所、医師会館で救急窓口を開催していたのですが、ほとんど一次救急の患者が夜昼問わず無く、むしろ須坂病院に来るということで、須高医師会と須坂病院、行政との3者で話しあいまして、須高医師会と共同で須高休日救急診療室を須坂病院の救急ブース内に設置し連携しながらやりましょうということで2006年4月にオープンしました。

これは、県外の医療機関でも意外と実施していそうで実施していないものです。テナント方式とか同じ敷地に設置する例はあるようですが、同じ救急外来と一緒に連携しながら一次、二次救急をやっているというところは無く、私もこれらを視察したときに報告をさせていただいたのですが、かなり反響が大きかったです。

隣の中野市でも実施したいということで、北信病院から3回くらい須坂病院へ来ましたが、北信病院では出来なかったという経過がございます。



私が行く前から、須坂市が須坂病院の医師を守ろうということで、広報誌に「思いやりが地域医療を支える」ということで地域医療を守るのは一人ひとりの心がけというようなことで地域住民の方にはかなり働きかけをしていただいております。



それでいよいよ昨年4月、地元でお産ができないということで若いお母さんたちが立ち上がりまして、「地域で安心して子どもを生み育てることができることを望む会」というものを作りまして、非常に活発な活動をしてくださいました。そのひとつとして署名活動がありまして、地域の8割にも及ぶ57,920筆を集めていただきました。

その他に、その当時の市長とか県の行政、病院長と地域住民が懇談会を実施したり、それからいろいろなところで講演をされている済世会栗橋病院の本田宏先生を講師として、自分たちの地域で起きている医師不足について勉強しようではないかということで、お母さんたちが立ち上がりましてディスカッションを実施しました。

何回か、私たちも出席させていただいたのですが、本当に行政の方もお母さんにかきたてられてといいますか、お母さんたちに協力せざるを得ないような状況になってみんなで勉強会をしたという経過があります。



そういうことでお母さんたちの多分熱意が伝わったのだと思います。11月に須坂病院に産科医2人がめでたく着任することになりました。これは市町村の代表者が知事、勝山局長とこちらに来まして懇談をしました。住民の代表者も当然いらっしやいまして「医療従事者の支えがあって地域生活ができることを知り住民のひとりとしてできることをしたい。」というようなことを述べていらっしやいました。



それから、いろいろなところでやはり産科医不足ということで駒ヶ根市も現在も困っていらっしやいますけれども、そういうことで駒ヶ根市の公報の方が取材に来まして、「望む会」の若いお母さんの代表の方、健康づくり課の課長がコメントをして駒ヶ根の広報誌に掲載されたもので、これが内容です。



須坂市の広報誌に、須坂病院のコーナーを作っていただきました。「みんなで支える須坂病院」という題で、これは「来年３月から分娩の取扱を再開いたします」ということで大々的に掲載した内容なのですが、この後ずっと毎回須坂病院の内容をPRして載せていただいています。



今まで須坂病院と市は、位置的には目と鼻の先なのですが、関係は少し遠い関係でもありました。私が昨年７月に市に派遣されたということで、須坂病院の職員と私がいる健康福祉部の職員が今後の地域連携についてどうしようかということで意見交換をもちました。それから須坂病院の現場で働く医師たちが白衣のまま市役所に飛んできて、三市町村の議員や行政職員に対し病院の現状や過酷な勤務の実態などの生の声を聞いていただくというようなことも実施いたしました。



それから、産科医は着任したのですが、内科医、小児科医の医師が周辺の医療機関と比べると非常に少ないということで３市町村と病院とで合同で医師招聘のパンフレットを作りました。皆様のお手元にパンフレットが配布されていると思うのですが、これはパッと見るとちょっと観光PRのパンフレットに見えるのですが、それがまたとてもいいということで、私も県外等で報告させてもらったときに評価を受けています。

読んでわかるよりも見てわかりやすいパンフレットということで、先日長崎の学会で報告させていただいたのですが、その際大きな病院の医師たちと交流したときに、これが非常に取り上げられまして、手持ちの３０部が足りないぐらいに配って参りました。ですので、皆さんも是非、手元にございますので、知っている方がいらしたらご紹介いただければと思います。

3 市町村―行政と須坂病院が合同で作るということは、なかなかあるようでないんだということで、私も作成に参加していますけれどもほんとうに医師たちも参加し、3 市町村の行政職員も忙しいのに来ていただきました。病院の環境もそうですけれども、医師だけでなく家族も一緒に来ますので、一緒に生活する環境の素晴らしさもお案内した方がいいということで皆さんの意見をそれぞれの立場からいただいております。

また、DVD も作成いたしましたのでご覧ください。



私が着任したのでいろいろな団体に挨拶をせよということで、まず民生児童委員会、それから須坂市が発祥の地だということで非常に活発な活動をしている保健補導員会に対する挨拶で私が派遣された目的等を話したら、須坂病院に対する非常に厳しい言葉が聞かれました。ここまで言うかと思うようなことまで言われました。

民生児童委員や保健補導員は本当に直接困っている方の支援をしてらっしゃるので、言われても仕方が無いかなというような内容もございました。ということで、これは言われっぱなしでは困るということで、課長や保健師を連れて民生児童委員の会長の自宅に押しかけて、「須坂病院が皆の利用しやすい病院にするためにはどうしたらいいのでしょうか」と、会長と2時間程話しました。

そうしたらまず、「須坂病院を知らないから、昔の噂のようなものも出てきているのではないか」というようなことを言われまして、院長や事務長が外へ回って直接支援している民生児童委員などと懇談をしたらどうかと。民生児童委員の方も非常に知性の高い方が多いのですが、今の医療というのはすごく変化をしていますのでわからない。ですので、今日の医療をわかっていただかなければいけないということなのです。

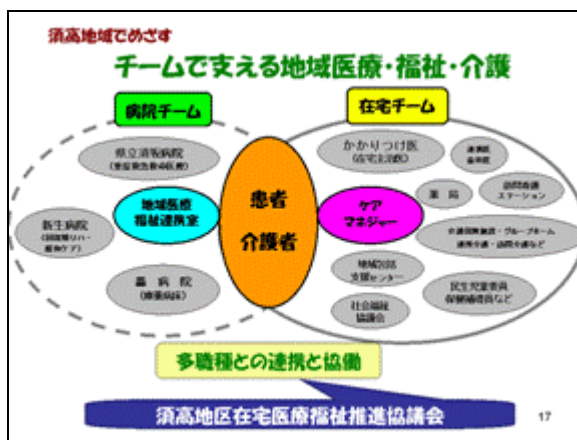
それと院長や副院長、看護部長も、実際に地域で須坂病院に対して起きているそういったことも知らなくてはいけないのではないかとということで、昨年9月から今年2月まで須坂市をほぼ回りました。最初は病院に対する厳しい言葉が出ていました。でもそのうちに段々医療の状況というのがわかってきたせいか、やはり地域医療を守って自分たちが利用しやすい須坂病院にしなければいけないのではないかとというような言葉に変わってきました。これからは、高山村、小布施町も回る予定で今調整をしています。

保健補導員は女性だけですので、看護部長に出席してもらい、病院の取り組みとか現在の看護現場の大変さなどを説明していただきました。



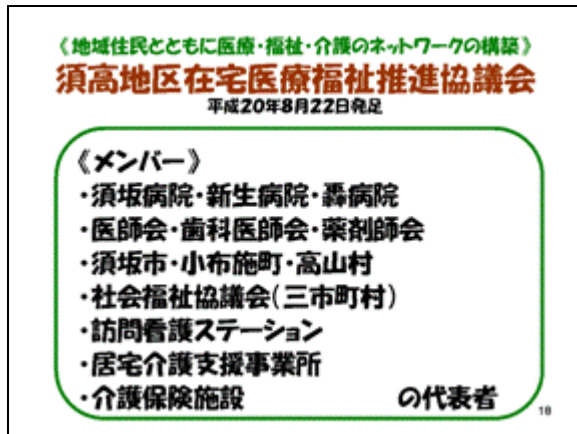
これは、今までは須坂病院祭と須坂市健康まつりは別々に実施していたのですが、一緒に実施しようじゃないかということで、昨年から共同開催になりました。そこは須坂市のみなので（小布施町に所在する）新生病院は入っていないのですが、医師会長とか轟病院の院長、須坂病院の院長に出席いただいてシンポジウムを実施しました。

また、健康福祉部長と保健センターの職員が看護師役になりまして、須坂病院でよく発生しているような内容をテーマにして、病院勤務医のハードな状況などを寸劇にして住民の方にアピールしました。



今までは、私も地域連携室にいて病院対〇〇機関ということで、あるケースに対する連携は程々にできていたのですが、地域全体でのシステムみたいなものは無かったのです。

7月に着任してから、どのようにしたら良いかということで話し合いまして、3病院は非常にまとまっています。在宅チームも医師会を中心として程々に動いていますので、まずは病院チームと在宅チームが連携・協働しまして、チームで支える地域医療・福祉・介護のまちづくりをするために、須高地区在宅医療福祉推進協議会を立ち上げたらどうかということでいろいろな機関を回りまして働きかけました。



私は立ち上げに半年ぐらいかかるかと思いましたが、簡単かというと、皆さんに協力いただきまして、赴任した翌月の8月22日に協議会が立ち上がりました。メンバーは3病院、3医師会（医師会、歯科医師会、薬剤師会）、3市町村の行政、それから社会福祉協議会、須高地域の訪問介護ステーション、居宅介護支援事業所、各介護保険施設の代表者の16名です。

須坂市が事務局となりまして8名ほどが担当しており、毎月協議会を実施しています。



これは協議会を開催している場面なのですが、キーワードとして顔の見える連携一私はいつも顔の見える連携、どこでも連携をするということで活動しているのですが一須高地域独自の方式の創設を目指すということで、当初様々な問題が出てきましたが、その中で課題を3点に絞りました。

ひとつは、薬剤師は10年前から「お薬手帳」の普及ということで頑張っているのですがなかなか浸透させることができないということで、まずは須高地区独自で共通の「お薬手帳」を作ろうということ。

ふたつめは、診療所間の連携体制。訪問看護ステーションがかなり活躍してくださってまして、在宅の看取りが増えてきているのですが、なかなか診療所1件で365日24時間診るのは大変ということで、診療所同士の連携体制を作ろうじゃないかということ

もう一点は、今まで須坂病院の地域連携室が企画して「退院支援カンファレンス」検討会をケアマネージャーや訪問看護ステーションの看護師など、いろいろな職種で実施していたのですが、在宅患者を看取る医師はほとんど参加していませんでした。ということで診療所の医師が参加できる退院支援カンファレンスの体制作りをしようということになりました。



これが、「お薬手帳」の表紙なのですが、対象を絞りまして3歳までと75歳以上、精神疾患の方として、須高地域の共通の「お薬手帳」ということで、今ほぼ出来つつあり、9月から発行予定です。

ただの薬剤情報だけではなく、いろいろな須高地域独自の内容を掲載しようじゃないかということで薬剤師を中心に検討を行い、それに県の地域包括医療協議会のバックアップも受けまして手帳を作成しました。



二点目ですが、「主治医が不在でも地域連携でカバー」ということで、これは医師会の理事の先生が積極的にアンケート調査等していただきまして、内科系の医師18人が手を挙げていただきまして、在宅医療で容態が急変した場合、主治医が不在でも訪問看護ステーションの調整で代替りの先生が対応するということです。

そうすると、何でもかんでも救急車で須坂病院へ運んでしまうということではなく、在宅で看取られる予定の方はしっかり看取られることが可能となるという形です。これは6月から開始されています。



それから、退院支援カンファレンスですが、これも、朝8時からと、診療所の医師が1時30分から3時までの時間ならば出席可能ということで出席いただいて、退院後の患者が生活に困らないように事前に関係者でカンファレンスを行います。



これからの在宅医療については、やはりケアマネージャーが中心に訪問看護ステーションがかなり役割を果たす時代が来ると思います。ですが、診療所の医師とケアマネージャー、医師と訪問看護ステーションの間になかなか距離があって近づけないという意見があり、まずは訪問看護師と医師会の医師とが話し合いを実施したところ、いろいろな問題が出されました。

その中で主治医と訪問看護師がスムーズに連絡をするにはどうすればよいかということで、連携連絡表というものを作成しました。それで、在宅での看取りについてもこんな形でやってみましょうという話し合いがされました。

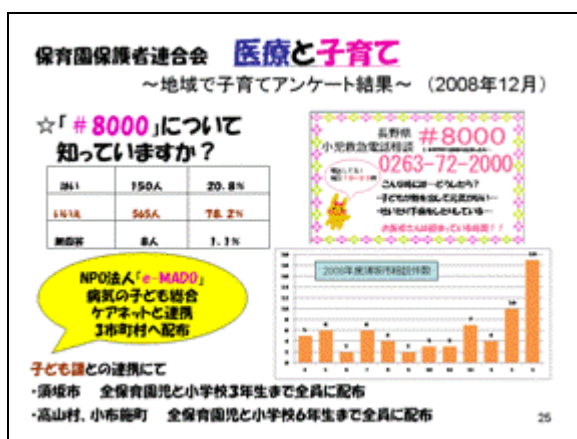
それから、ケアマネージャーと医師会との話なのですが、ケアマネージャーについては看護師や保健師、ヘルパーなどのいろいろな職業の方が資格を取得したうえでおられるので、なかなか医師会の医師に近づけない、距離があるというようなことだったのですが、このような医師会の医師との懇談会を定期的を開催することによって、同じ土俵に乗れるのではないかとということで、懇談会ではいろいろな問題が出されており、今は少しずつですがスムーズに動いてきています。



これも、地域住民の方に須高地域の医療とか福祉介護のことを知っていただくということで、協議会でシンポジウムを定期的に行いましょうということです。

第1回は医療編ということで、「地域の医療の現状を知ろう・語ろう」というテーマで、須坂病院の講堂を借りて3病院の院長、医師会、訪問看護ステーションの看護師にシンポジストになっていただきまして、3月の半ばに開催しました。その際にアンケートを実施したのですが、地域住民の方からは、地域の医療の現状がわからなかったのがわかって安心したというような意見が出ておりました。また、シンポジウムをきっかけに、訪問医療、福祉環境を住民参加で作り上げていけたら良いというような貴重な意見をいただきました。

それから第2回は在宅編ということで、7月4日に須坂市メセナホールで「在宅介護の現状を知ろう・語ろう」というテーマで開催しまして、3市町村から1名ずつ実際に介護をしている方に出していただきまして、その他診療所の医師や訪問看護ステーションの看護師、ケアマネージャーやヘルパーに助言者として一緒にフロアでの意見交換を重視して行いました。この際にもアンケートを実施したのですが、このような大きな会議でなくてもいいが公民館等でこのような集まり、介護者がいろいろ勉強するチャンスの機会を企画して欲しいというような意見がありました。



これは、昨年の12月に保育園の保護者連合会で地域で実施した子育てアンケートの結果です。子育て相談、「#8000」なのですが、私は皆さんが知っているのではないかと考えていたのですが、アンケート調査の結果、8割以上のお母さんが知らないということがわかりまして、信州大学に事務局がある「e-MADO」と連携を取りまして、3市町村の全保育児と小学生—須坂市は小学校3年生までと、高山村、小布施町は小学校6年生まで—全員に配布しました。データは後日「e-MADO」からいただく予定なのですが、須高地域はかなり電話が増えているという話でした。

平成21年3月議会代表・一般質問

地域医療福祉介護のネットワーク構築について



1. 地域で在宅医療、福祉の目指すものは何か
2. 須坂市の取り組みの現状は
3. 須坂市の今後の課題は
4. 課題が解決された場合はどのような状況の地域になるのか

26

須坂市の議員は非常に地域医療について勉強している方が多く、私のところにもいろいろ聞かせてくれと来ています。スライドは3月の定例議会での代表質問、一般質問の中で地域医療、介護のネットワークについてということで質問された内容です。

地元メディアとの連携

須高ケーブルTV

“共創”
皆でつくろう
元気な 須坂



須坂病院の
お産再開とこれから

27

それから、地元のメディアとの連携も非常に重要で、須高ケーブルテレビや須坂新聞には本当に協力していただいています。「皆でつくろう元気な須坂」は須坂病院の産科再開について取り上げていただいたものなのですが、須坂病院の二人の産科医と診療所の「ソフィアこどもクリニック」の医師のコメントを入れていただいたりして、非常に良い番組を地域住民に対して放送していただいています。

市民と共に地域医療福祉介護を推進していくために医療部門・在宅部門・施設部門の内容を須坂新聞に連載。

須坂新聞

地域で支え合う医療・介護・福祉

多職種連携と協働

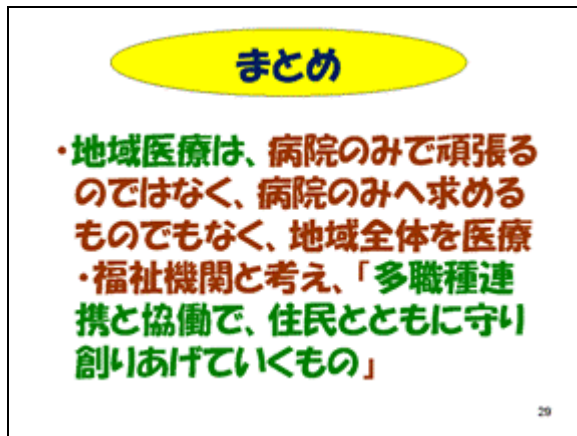


順 号	内 容
1	医療福祉介護連携の概要
2	急性期医療(急性性脳神経科)
3	地域医療連携の役割
4	「かかりつけ医」の役割
5	「お母さん」の役割
6	救急車と救急医療について
7	救急医療と救急医療の役割
8	急性期医療(救急医療)
9	救急医療の役割
10	救急医療の役割
11	救急医療の役割
12	「お母さん」の必要性について
13	救急医療と救急医療の役割
14	救急医療と救急医療の役割
15	救急医療と救急医療の役割
16	救急医療と救急医療の役割
17	救急医療と救急医療の役割
18	救急医療と救急医療の役割
19	救急医療と救急医療の役割
20	救急医療と救急医療の役割
21	救急医療と救急医療の役割
22	救急医療と救急医療の役割

28

これは須坂新聞と共同で、「地域で支え合う医療・介護・福祉」というタイトルで、医療編・在宅編・施設編という形で22回に渡って連載を行うということで、スタートしています。

それほど記事を書いてくれないのではないかと私は心配をしていたのですが、皆さん自分の機関をPRしたいという気持ちがあるのか意外にスムーズに出稿していただいて連載が始まっています。



ということで、まだ1年の取り組みでなんともいえないのですが、私の中のまとめといたしまして、地域医療は病院のみで頑張るのではなく、病院のみへ求めるものでもなく、地域全体を医療、福祉機関と考え、職種連携と協働で住民とともに守り創りあげていくものではないかなと今は思っています。

以上です。ご静聴ありがとうございました。